

◆夢や希望を抱きながら新1年生が入学してきました。また多くの教職員が今年度も柏崎刈羽の地に赴任してきました。新学期がスタートしてまもなく1ヶ月となり、各学校の教育活動もようやく軌道に乗り始めたことでしょうか。すべての子どもに、よりよい教育環境で、よりよい教育をしてあげたい”は、教員である限り誰もが思うことです。教育センターが行う専門研修講座や教育相談などを有効活用され、教員としての力量を高めると共に、子どもたちとの出会い・ふれあいを大切にしていただきたいと願っています。

さて、過去の「全国学力・学習状況調査」の結果分析などによると、「開かれた学校づくり」に積極的な学校の方が、そうでない学校よりも“正答率が高い”ことが明らかになったそうです。具体的には、地域の人材を講師に招いて授業を行ったり、学校の生き生きとした取組を積極的に「ホームページ」や「たよりの」などで情報発信したりする、などがあげられていました。

昨年度は、今までの全国学力テスト

トの正答率が常にトップクラスだった秋田県などの教育実態が何かと話題になりました。学力トップの要因としては①熱心で落ち着いて学習する子ども②考えを話したり書いたりする学習及び話し合い意見交換する学習③家庭での学習習慣の定着などが指摘されています。そしてそれを支える基盤としては「家庭・地域と学校の連携」「生活習慣の安定」「優れた研修システム」があるそうです。“当たり前ができる”教育環境こそ大事であると、改めて感じました。

(2010年4月号)



◆私的な話で恐縮ですが、先日、中学校時代の同級生で現在、ボスニアの初代大使として活躍されている疊二夫さん（柏崎市出身）に、近況報告も含め、同級会の案内をメールで送ったところ、すぐに長文の返信メールが送られてきました。

彼はイラン、ニューヨーク、タイ、国連代表部、ガーナ、イギリス、ボスニアと長きにわたる外国生活を送っていますが、文面からふるさとや友への想いが伝わってきて、大変懐かしく胸にこみ上げてくるものがありました。また、日本とボスニアとの友好関係のことや初代大使としての苦労話なども、詳しく書き添えてありました。

情報通信網の発達により、今はこのように瞬時に世界中のどこからでも双方向で連絡が取れる大変便利な時代になりました。テレビ電話システムを使えば、パソコンを通して相手の顔を見ながら外国にいる友人と話をすることもできます。数十年前の社会では考えられないことが、現実社会としてあります。

「教育の情報化」は、国の最重要課

題の1つです。アジア諸国では、隣の韓国やシンガポールなどが、先進的な取組をしていると聞いています。

柏崎市も、昨年度末にようやく教職員一人一人にコンピュータを、また各学校には電子黒板などを配備し、ハード面の環境が一応、整いました。また新たな「ネットワーク教材」も導入され、児童生徒は、学校はもとより家庭からでもネットを通じて自主学習できる環境が整いました。有効活用すれば学力向上に大いに役立つと期待しています。

ネット社会の「影の部分」にも十分注意を払いつつ、これからの情報化社会を生き抜いていける児童生徒の育成に、本気で取り組んでいきたいものです。そしてそのサポートを教育センターは行っていきます。

（2010年5月号）



◆先日、市立教育センターと新潟工科大学の共催事業である「青少年のための科学の祭典2010 柏崎刈羽大会」を開催いたしました。

休日にもかかわらず約2000人の親子連れが訪れ、実体験をおして科学の楽しさやおもしろさを感じていただきました。このようなイベントは、県内の地区理科教育センター単位で何所か行われていますが、柏崎刈羽大会は、質量共に大変充実していると聞いています。

全国大会を2度（平成14年と16年）も経験している実績がそのような伝統を育み、また毎回ブース運営に積極的に協力してくださる大学生や中学校の教員、企業の皆さんの熱意があるからこそ感謝いたしております。

さて、普段私たちが何気なく当たり前だと思っている現象も、その背景には科学の原理が潜んでおり、「どうして？なぜ？」といったような疑問が湧いてくるじやありません。私はそれらの疑問を、五感をとおして見たり、知ったり、感じたりますねじやありません。科学の祭典「を、毎回楽しみにしている一人でもありません。教育センターでも、

当日を迎えるまで“科学のおもしろさや実感することへのトキメキに満ちた子どもたちの笑顔に、もっと出会いたい…”そんな思いを込め、試行錯誤を繰り返しながらブースの準備を進めてきました。

子どもたちの理科離れが何かと話題になっていますが、学校においても「実体験をおし、科学の楽しさ、おもしろさを肌で感じる授業をしていただけたら」と期待しています。そして子どもたちの夢や可能性を広く、大きく伸ばしていきたいものです。新学習指導要領では、理科教育に強い追い風が吹いています。（2010年6月号）



◆人間関係の希薄化が問われている今日、子どもたちは「人の心」を失いかけていると厳しい指摘をする方がいます。その方は、“人間らしさと人の心を育てる自然・生活体験やスポーツ体験などが乏しくなっているからだ”と言い、いじめや不登校問題などは、これらの現れの一つとも述べています。

元来、子どもは「遊びの天才」だと言われています。それを発揮する場とゆとりがなくなれば、生きる力も知恵もやせ細ってしまうのは当然かもしれません。

残念なこと、今の子どもたちの親の世代も、子ども時代に思い切り遊んだことのない「遊び阻害世代?」が多くなってきています。親自身が重要性を認識していないから、遊び環境は今後さらに悪化する可能性があるように思えてなりません。これから始まる夏休みは、これらの体験を補うための絶好のチャンスでもあります。“遊びと学びと体験の中で知的好奇心を維持し、ゆったりと過ごす。”そんな生活を一日でも多くさせてやりたいと思うのは、私だけでしょっか?。

先日、恒例の「教科書展示会」が終

わりました。新学習指導要領に基づいた小学校の教科書が初めて登場し、関心も高く、多くの閲覧者がありました。約30年ぶりに教育内容が増え、学校現場ではどのように教えるか対応に苦慮されることと思います。

全国連合小学校長会の調査によれば、新学習指導要領の先行実施に対して、多くの公立学校長は、児童や教員が忙しくなり教育課程実施上の最大の課題は外国語活動の実施で、教員の指導力向上策が必要と考えていることも明らかになりました。ますます学校現場への支援の在り方が問われてきそうな感じがしています。(2010年7月号)



◆教育センターでは、例年夏休み中に、多くの研修講座を組みます。今年度も情報教育の17講座を筆頭に、特別支援教育、キャリア教育など36講座を実施し、多くの教職員に受講していただきました。その中から印象的だった体験型講座を二つ紹介します。

一つは「小中合同野外研修会」（理科）です。今年度は上越地区科学技術教育研究会と共催だったため、41名の参加がありました。研修地は、中央アルプスの最高峰である木曾駒ヶ岳（標高2956m）でした。千畳敷力丸（2612m）までは、ロープウェイなどを利用して一気に登りましたが、そこから先は自分の足だけが頼りとなります。途中、コマウスユキソウやクロユリ、チシマギキョウなどの高山植物との出会いがあり、疲れを癒してくれました。標高2865mにある山荘で一泊、夕焼けが感動的で、大自然の雄大さや神秘さを自分の肌で感じ取ることができました。

もう一つは、文化振興課と共催で実施している「市内文化財巡り」（社会）です。今年度は、西部地区と国道353号線沿いにある11か所を、1日か

けて見学しました。講師の説明をお聞きし、自分の目で確かめながら、多くの文化財と巡り合うことができました。「柏崎市に住んでいながら、また柏崎市の教員をしていながら、初めて知ったことがたくさんあり、大変勉強になった。」とは、毎年、多くの参加者から聞かれる感想です。

紹介した以外にも、今すぐ実践してみたいと意欲をかき立てられたり、取り組み視点を明確にしてくれたりなど、皆さんの心を捉えた講座がいくつもあったことと思います。今の教職員は忙しいといわれています。忙しいからこそ、限られた時間を有効活用して、自分のキャパシティを広げ、心を豊かにしていきたいものです。

（2010年8月号）



◆数年前になるが、特色ある教育活動に取り組んでいる東京都内の2つの区立学校を視察させていただく機会があった。一つは「開かれた学校づくり運動」のモデル校であり、当時「ミニミニスクール」の全国第1号としても注目されていた「足立区立五反野小学校」、もう一つは小学校と中学校の垣根を取り去り、9年間を見通したカリキュラムを編成、実施している施設一体型の小中一貫校「品川区立伊藤学園」だった。現時点では、いずれも新潟県には無いタイプの学校で、しかも両方の区では、子どもたち（保護者）が、行きたい学校を自由に選べる「学校選択制」を実施していた。学校のあらゆる実績や評価・評判などが、そのまま児童生徒の入学数に反映するという、管理職にとっては極めてシビアな世界で学校経営や運営を強いられていた。

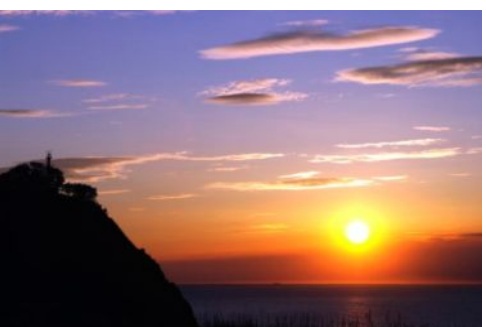
五反野小学校では、家庭・地域・学校が三位一体の教育に取り組み、「学校のオープン化」「地域の学校化」「授業診断」などに取り組んでいた。とにかく学校の情報発信力がすごい、ホームページなどのWeb情報が大変充実していた。それ以上に驚いたのは、学

校・家庭・地域で「学校運営協議会（学校理事会）」を組織し、そこで学校の方針や運営計画などを決め、教育活動に取り組んでいたことだった。

また総工費53億円で建設した伊藤学園については、可動式の室内温水プールがあり、オールシーズンで水泳授業ができたり、一般市民にも開放していたり、うらやましい限りであった。その後、9年間を一緒に過ごすことで、どのような成果や課題が見えてきたか、学力や中一ギャップの実態など、関心のあるところである。

地域そのものが失われつつある東京の学校が、そのまま新潟県のスタンダードになるとは決して思わないが、様々な視点や角度から教育について考えさせていただくよい機会となった。

（2010年9月号）



◆猛暑だった夏が終わり、かけ足で秋がやってきました。教育センターの前庭にあるモミジも色づき始め、いよいよ秋本番を迎えました。各学校では後期がスタートして3週間ほど経ち、文化祭や学習発表会などの行事で、何かとあわただしい日々を過ごしていることと思います。

先日、教育センターの講師として岡山大学大学院の佐藤暁先生をお迎えし「授業づくり」の講座を行いました。

先生の専門分野は特別支援教育ですが、あえてそのような色合いを出さずに「子どもも教師も元気が出る授業づくり」という演題で約2時間の講義をしていただきました。佐藤先生は、全国各地で年間150回以上の研究授業に参加され、1つの授業で80枚ほどの記録写真を撮られるそうで、とにかく膨大な資料を持っておられます。

講義の中で佐藤先生は「学校の先生は、決定的に読書量が少ない」と指摘され、「その人の知っている言葉がその人の見えている世界だ」「言葉はたくさんの考えを生み出す源であり、物事を見る解像度を増やせる」「言葉を多くすることは、人生を楽しくする

「言葉が少ないとキシヤスイ」など、「言葉」の重要性を話されました。

また、一人一人の児童生徒の可能性を引き出し、希望と自信を持たせることは、すべての教師にとって必要な資質であり指導力であると述べ、「授業がうまくいかないのを発達障害のせいだけにしてはいけない」とも話されました。そして「困り感」を抱きつつも通常の学級で学んでいる子どもたちの支援の根本的な手当として、最も優先されるべきものが「授業づくり」であり、「授業の中で困っている子どもにも、授業で救おう」と結びられました。通常学級での発達障害の子どもたちの対応について、多くの示唆をいただいた講座でした。(2010年10月9日)



◆ICT（情報通信技術）は、「校務の情報化」や「わかる授業」への「なご」効果を発揮するということ、多くの学校で利用されるようになりました。しかし、ICTの操作に自信がなかったり、授業での活用イメージが思い浮かばなかったりした場合は、必ずしも期待するほどの効果をあげることができないと言われています。

少し古いデータですが、文部科学省が平成18年に実施した「教員勤務実態調査」によると、1ヶ月あたりの残業時間は、44年前の昭和41年では約8時間だったのに対し、平成18年には約34時間と大幅に増えてきています。

そもそも「校務の情報化」は、先生方の事務処理にかかる時間を軽減し、できるだけ多くの時間を子どもたちと直接関わってもらいたいという主旨で始まりました。別の言い方をすれば、先生同士が様々な情報を共有し合うことで、事務処理や職員会議にあてる時間を減らし、空いた時間を子どもたちのために使うということになります。

また「わかる授業」を進めるには、教材を分析し、どのような教え方をす

るとわかってもらえるか考え、以前から巧みな話術や板書等で授業をしてきました。しかし、今はICTを活用することで、視覚にうつたえたり、豊かなイメージをふくらませたりしながら授業を進めることができます。

柏崎市も、昨年度「教育の情報化」や「校務の情報化」を進めるためのハード面の整備が行われました。これからはそれらを、いかに有効活用するかにかかっています。そのためには、学校全体でICT活用に取り組み、つまり先生方のベクトルを揃え、一人一人が限らない自己変革の意識を持ちながら推進していくことが大切です。そのためハードルもありますが、本気でICTを授業や校務の改善に位置づけ、効果を実感することを目指していきたいです。（2010年11月号）





◆「在りし日を偲べば、幼い頃の丁温泉スキー場でのことを想い出します。まだ道路が整備されていなかった時代、骨折した私を背負って9kmの道のりを降りてくれた父。温かく頼もしい背中は今も胸に鮮やかです。スキーに行つてけがが出ると、私の時と同じようにして治療できる場所まで送っていただくことも懐かしい想い出となっております。困っている人に手をさしのべることの出来た父の大きな優しさは私の誇り。父が人を背負って歩いた道は、今、車が通れるようになっております。そこにはかつて村役場で道路・企画観光行政に携わっていた父の心が込められているような気がしてなりません。

父は、家族が見守る中、88歳の実り多き生涯を過ごしました。」

これは先日ある方のお別れ式で読まれた追悼文です。参列した多くの人の琴線を揺り動かし、私にとつても、失われつつある「人間の優しさ」を改めて思い起こすよい機会となりました。

日本には四季があり、その季節ごとに咲く花や風景が絶え間なく変化しています。特に長年住み慣れた新潟県は四季折々の変化が顕著であるように思

えてなりません。そんな中で私たちは様々な体験をし、多くの人と出会い、ふれあいながら人間的に成長していきます。時代の流れからか、今は物質的には大変便利な社会になりました。ポタンを押せば料理や洗濯ができるというように、機械化・効率化を求める思想と技術が生活を快適なものにしました。その反面、心が育たなかったり、自然の生命のリズムを無視したりした生き方も強いられています。

物質万能や効率化を追い求める社会にあつて、将来のある子どもたちの成長へのエネルギーやみずみずしい感性がいつか枯渇しなければいいかと考えてしまうのは私だけでしょうか。来年は皆さんにとって、更なる飛躍の年となるように祈念しています。

よいお年をお迎えください。

(2010年11月号)

